▼最優秀賞受賞作品（エッセイ）

# 一升の米

山端　みどり

どうしても忘れられないひとつの光景がある。

七十年も前のこと。

昭和二十年代はじめ、その日私は弟と座敷で遊んでいた。そこへ真っ黒のひきずるような長いマントを纏い、大きな荷物を背負った異様な姿の女の人が玄関に立った。

小柄な人だった。

手入れのしていない長い髪を一つに束ねた、いわゆる「乞食」の人だった。

それを見た母は急いで台所にいき、黒光りした古い一升枡に山盛りの白米を入れてくるとその女の人の信玄袋に勢いよく「ザーッ」と流し入れた。

女の人は一言も喋らなかった。

ただそれだけのことなのだが強烈に覚えている。あんなにあげて今晩の米はあるのかなあと思ったことまでも。

あの敗戦から数年は、どこの家庭もそうだったけれど、特に私の家は子どもも多く貧しかった。今と違って行政の支援なども無く、その日の米にも困っていた筈だった。

なのに何故母が貴重な米を躊躇なく分け与えたのか？　むしろ母は、いそいそと喜んであげているふうにさえ見えた。

その理由がハッキリ解ったのは、実にそれから五十数年経ってからだった。

長姉が認知症になった。

実家の二階のタンスに昔から古い掛軸などと一緒に古びた和紙の日記と覚しきものが入っていた。

こよりで綴じたかなり分厚いものだ。

別に、これも束になった「ご朱印帳」もあった。大事なものだと思われたので、姉に捨てられる前にこっそり持ち帰った。

それは、私の祖父が昭和初期に綴った「遍路日記」だった。

祖父常太郎は一八七七年、明治十年生れ。今から一四五年前のことになる。

私は祖父が亡くなったあとに生まれ、祖父のことは何も知らない。

白黒の写真の中の祖父は、白い髭を長く伸ばし数珠を手に白い着物の「お遍路」の格好をしている。口を真一文字に結び怖そうな人だ。

私は兄と協力して祖父のことを調べてみる事にした。

兄は祖父の没した年に生まれて、みんなから祖父の生まれ変わりとよく言われたそうだ。頼んだことをすっかり忘れた頃、兄から詳しい家系図と年表が送られてきた。

郷里の役場から除籍戸籍謄本を何通か取り寄せて調べたそうだ。

日記は永い歳月を経て和紙は茶色になり、インクの部分は色が消え筆圧の跡のみ、鉛筆部分はかろうじて読めるが達筆の崩し字故、これも又読めないところが多かった。

祖父は、五十才をすぎた昭和五年頃か

ら全国行脚を始め、お金が尽きると戻り、工面がつくと又行く、を七年程繰り返していた様だ。

動機については「孫が生後まもなく病気にかかり、諦めていたが奇跡的に命が助かったのでお礼参りにでる」とあった。が、本当の理由はわからない。

遍路といっても現代の「お遍路さん」と違って小ぎれいなものではなく、実際は「遍路乞食」と呼べるような放浪に近いものだったと思う。

実際に、新潟県佐渡島の知り合いの家に祖父が遍路途中に立寄った時、髭は胸迄長く伸び白衣は薄汚れて酷い格好だったそうだ。そこの家の人は、風呂に入れてやり、ご飯を食べさせ白衣を洗って又送り出してくれたそうだ。

履物は当時は、わらで作った「わらじ」を履いての旅だった。日記にも、「わらじ今日で十二足目」などと記されている。

わらじも道中買い求めていたようだ。神社仏閣への参拝の賽銭やご朱印代、泊る木賃宿代、交通費など、お金も必要だ。

祖父は長男の嫁とそりがあわず、次男である私の父宅に身を寄せていた。

父は仕事柄収入も少なく、子沢山でその日の食べ物にも困る程の貧しさ、祖父に持たせてやるお金の余裕などある筈もなく、都市部で少々出世している三男に無心していたようだ。

郵便局から三男に「カネオクレ（金送れ）」と電報を打った、とある。

しばらくして郵便局に寄ったが届いていない。次の日も又その翌日も行ったが、まだ着いていない。

三男にしてみれば自分達の生活もあるし、身勝手な父親の度々の無心には応じられない時もあっただろう。

昨夜は、お寺の床下で寝たが蚊がいて眠れなかった。

村の子ども等が追いかけてきて石を投げてきた。馬鹿野郎!!　などとある。

納屋を借りた農家のおかみさんが白衣を洗濯してくれた。ありがたかった、とも。

昔の洗濯は、タライに水を張って洗濯板でゴシゴシこすっていたから、女の人にとってはひと仕事だったが、昭和初期はどうだったのだろうか。

見知らぬ人々から沢山の親切や多くの施しも受けた旅だった。

松本清張の小説に『砂の器』がある。

何故かこの小説にひかれ、私は何度も読んだ。主人公の「和賀英良」は、今をときめく新進作曲家で、高名な代議士の娘と結婚して世の注目を一身に集めている人物である。

そんな彼には、どうしても人に知られたくない過去がある。

その為に、懐かしがって訪ねてきてくれた昔の恩ある人さえも、手にかけて殺めてしまう。そこから物語は始まる。

彼の父親は「ハンセン病」を患い、村を追い出されてしまう。

父親は幼い息子（英良・幼名秀夫）を連れて、あてのない放浪の旅に出るのである。

白い遍路服を着た父と子。

父は小さな息子の手をひいて、碧い海とまっ青な空の海岸線を何処までもひたすら歩き続ける。

ある時は、同じ様な年頃の男の子等から囃し立てられ石をぶつけられる。悔しくて眼にいっぱい涙をためる秀夫。

ある時は雪の舞う里山を寒さに凍えな

がら。
ある時は花吹雪舞う満開の桜の下を。
寺の床下に眠り、施しの饅頭を半分に割って食べる親子。
映画は、二人を淡々と描写する。

それは全く祖父の旅と同じだった。
祖父も又石を投げられ、お寺の床下に眠った。四国の大海原を砂を踏みしめて、どこ迄もどこ迄も歩いたことだろう。
雪の降る日も雨嵐の日も
桜の土手も、たんぼのあぜ道も。
何を想って旅をしていたのか。
狭い田舎の煩わしい人間関係から解き放たれ、日々のお金にもこと欠いていたと思うが、それよりも広い世の中を五感で感じ、身も心も解放感、満足感でいっぱいだったのではなかったか……。
昭和初期の手つかずの大自然は、どこもどれ程素晴らしかったことか。
千葉県鴨川市に「清澄寺」という日蓮宗の名刹がある。
そこのご朱印があったので、近く迄行った時に立寄ってみた。
標高三七七Mの清澄山の中腹にあり、由緒ある静かなたたずまいのお寺である。眺望もいい。外房線「安房天神駅」から今でこそ路線バスが出ているが、それでもバスは延々と山を登る。昭和一桁の時代は、おそらく山全体がうっ蒼としていてけもの道のような道だったと思う。
祖父は麓からわらじ履きで、ひたすら登った。いったいどれ程の時間がかかったのか。「清澄寺」に立った時は祖父と同じ風景を見ていると思うと感慨深いものがあった。

私も旅が好きだ。
自分では「貧乏旅」と称しているが、見知らぬ土地の雄大な自然を、私はひたすら歩いて巡る。それが楽しくて本当に気持がいい。
寺社があれば必ず立寄って手を合わせている。祖父の事を知る以前から、祖父と全く同じことをしていたことに、とても不思議な縁を感じる。

明治十一年五月イギリス人女性探検家「イザベラ・バード」が従者一人を連れ、荷馬で東京→日光→会津→新潟を経て東北、北海道を旅した旅行記『日本奥地紀行』が『平凡社』から出版されている。
明治十一年は、祖父常太郎の生まれた翌年のことである。
道中の様子が細かく彼女の主観のままに記録されており実に興味深い。
会津地方では今でも「イザベラ・バードの通った道」としてハイキングルートになっている。
探険家は、暑い盛りの七月二日に郷里新潟の私の見知った集落を訪れている。「この地方の村落の汚さは、最低のどん底に到達している感じを受ける。
鶏や犬、馬や人間が焚火の煙で黒くなった小屋の中に一緒に住んでいる。
幼い男の子は、何も着ていなかった。
大人でも男子はマロ（ふんどし）しか身につけておらず、女子は腰まで肌をさらしており、着ているものといえば、たいそう汚れたものでただ習慣で身にまとっているのにすぎない。
彼等の家屋は汚かった。
彼らは野蛮人と少しも変わらないように見える。
私がかつて一緒に暮らしたことのある

数種の野蛮人と比べても見劣りがする。
もし私がこの旅行で、日光や箱根など外国人がよく訪れる場所だけに限られていたならば私はずっと違った印象を持ったことだろう」と記述している。
探険家は、そこから「阿賀の川」の大河を実に船で八時間かけて下り、新潟の河口で降船している。
「船の旅は実に素晴らしかった。
両側の風景は美景だし、船頭は熟練だし、うっとりするような船旅だった」と記している。現在でもこの「阿賀の川ライン下り」は絶景として知られている。
現在はダムによって水流が抑制されているが、当時は相当荒々しい危険な川下りだったと思う。
「祖父が生まれた時代、我々の郷土の祖父は劣悪な環境の中で日常を暮らし、成長し子孫を育んできた。
往時の状況がよくわかると同時に、庶民の貧困さには切なくなるおもいがする」と本のことを教えてくれた私の兄は、記している。
私の父親の代々の家業は、墓石等の「石工」であった。
粗末なトタンの作業小屋で「ふいご」に火を起こし、毎日鍛冶屋のように石工の道具をトンカン打って研いでいた。
器用な人だったようで、庭先には父親の造ったお地蔵様や亀にのった浦島太郎の像などが置かれていた。
父は、事故の多発する県道や、川で子どもが溺れて亡くなった場所に人知れず自分で造った「お地蔵様」を安置して供養していた。
当時は、家の前を旅のお坊様も多く行き交っていて、お坊様方は必ず庭のお地蔵様のところで立ち止って拝んでいた。
そうすると父は必ず「お茶飲んでいきなせ」と声をかけ、家の中に招き入れてお茶や漬物などをふるまっていた。お坊様の旅の話などを楽しそうに聞いていた。
祖父はとうにいなかったが、父は祖父もこうして旅に出て、多くの人にお世話になったことを知っていたのだと思う。
母が旅の「乞食」の人に、大事な米を迷うことなく分け与えたのも同じ理由からだったのだ。母は「女乞食」の人に、祖父の姿を重ねあわせていたのではないだろうか。
祖父は、戻ってきた時に旅先でのあれこれを父母に話して聞かせていたのではないか…と私は思う。
その感謝の思いは、両親の気持の中にいつもあったのだと思う。
父親は真面目な人で、朝から晩まで本当によく働いていた。
しかし仕事が特殊だったから毎月収入が有る訳ではなく、無い時は何ヶ月もない。
母は子ども達を食べさせ、学校に通わせるのに本当に苦労した。
前にも記したように、行政の支援が何ひとつある時代ではなかった。
私が育った頃は、上のきょうだいが働いていたから、自分の家が貧しいとは気付かずにいた。しかしひと回り年の離れた姉の頃は、貧乏の極みだった。
中学校の集金の払えない生徒数人が職員室に呼ばれた。
姉もその中にいた。
いつ持ってこれるか？　先生に聞かれたが、皆うなだれて答えようとしない。
暫く黙ってその様子を見ていた先生が、「よし！

わかった。
お金はもういい。
先生が何とかする。
その代り
おまえたちは
大人になったら
立派な大人になれ!!」

姉が結婚して平穏な生活を送っていたある日、その先生が定年を迎えたことを新聞で知った。
突然、昔のあの日のことが思い出され、新聞の上に涙がポタポタこぼれた。
姉は今、高齢だが家族に見守られて幸せに暮らしている。
それで思い出したことがある。
私が小学校四年生だったある日、担任の女性の先生から「ちょっといらっしゃい」と呼ばれて「十二色入色鉛筆」を貰ったことがあった。
私はうすボンヤリした子どもだったから、先生が何故色鉛筆をくれたのか不思議だった。後からその時のことを考えてみると、クラスのみんなが持っていたのに、きっ私だけ持っていなかったんだと思う。
その先生の名前は忘れない。
昔は教え子一人ひとりに心を配りよく見てくれていた先生が多かった。
それから以後も、私は何人かの先生の温かい眼差しをいつも背中に感じながら学校に通っていた。
小学校六年の時の担任は、熱心な先生だった。教材に『吉野源三郎』著『君たちはどう生きるか』を使っていた。六十数年も前のことだ。内容はすっかり忘れたのに、つい最近まで意に染まぬ生活をしていると『コペル君』が出てきて何度も耳元で囁く。
「これでいいのか?これでいいのか?」
軌道修正をすると『コペル君』は出てこない。不思議な体験だった。
今は『コペル君』は出てこないから、自分の意に沿った日常が送れているのだろう。
母親は明治四十五年二月生まれ。その年の七月に時代は「大正」へと変っている。今、存命なら百十才。
母は七才の時、自分の母親が病気で育てられないからと養女に出された。
家が恋しくて、毎日のように自分の家まで歩いて行ったそうだ。
その度に「ここはお前の家ではない!」と追い返された。
物心がついてから知らない家で育てられて、どれ程辛いことがいっぱいあったか……。
自分の哀しみ、辛さは心の襞(ひだ)に押し込めて、自分の持てる全てを子どもに注いで、生活困窮の中、九人の子どもを育てあげた。
横道にそれた子は、ひとりもいなかった。
母は愚痴と人の悪口は決して言わなかった。辛抱強くて穏やかだった。
それは、幼い時から他人の中で生きなければならなかった母が修得した、生きる為の智恵だったのかもしれない。
小柄な身体でよく働き、いつも毅然と前をむいていた。私は怒られた記憶がない。
教訓めいたことも「勉強しろ」とも一度も言われたことがない。
お陰で私は、一生分の「好奇心」を貰った。「ユキさん（母の名）程素晴らしい

女性に私は、いまだかつて会ったことがありません」と苦労人の兄は言っている。

貧しく育ったことは、ハンディでも何でもない。自分達きょうだいは、これからも親がしてきた様に真面目に愚直に生きていくだろう。

子どもは親を踏み台にして、人間的、経済的にも親よりも、より高く、より豊かに成長すべきものだと考えている。

人生をはじめからやり直すことが出来たらどんなにいいだろうか、と考えたことがある。

今度は勉強を一生懸命しよう！

今度は、失敗したあの道をあっちにいこう。

若い人には、自分の人生なのだから未来のことをよく考え、計画を立てて人生と向きあってほしい、と思う。

孫には、「人生は一回きりだよ。自分のやりたいようにしていいんだよ」と伝えている。

今迄自分のルーツも知らず、のほほんと過してきた事が恥ずかしくなった。いいきっかけを与えてくれた事に感謝する。と兄は言ってきた。

私も同じである。自分の祖先がどの様に暮らし、どの様な行動をしていたのか。今の自分とどの様に繋がっているのか。

良い学びの機会を持てた。

祖父は寡黙で変った人ではあった。

気力の満ちた年齢でありながら、息子の仕事や嫁の畑仕事を手伝うこともなく、孫たちの面倒を見ることもなく、己のやりたいことを貫いた。そうして一生を終えた。

何を考え、何を求めて長い年月、日本中を放浪して歩いたのか……。

私の父や母は、そのことをどう見ていたのか……。

今は知る術もない。

祖父は、昭和十八年に〝囲炉裏〟の傍らで眠るように亡くなったという。

六十八才だった。

常太郎爺さんの耳には、暖かな太平洋の打ち寄せる波の音が聴こえていたのではないだろうか。

日記の最後の頁には、たった一行。

「今日で七五四ヶ寺」。